



日本にサッカーを根付かせたい、地域づくりに貢献したい

小倉純二さん (財)日本サッカー協会副会長、FIFA(国際サッカー連盟)理事

プロフィール：阿佐ヶ谷在住。1962年古河電工(株)入社・経理部、財務部中心に勤務、サッカー部長として活躍。1981年古河電工ロンドン支店勤務、ロンドン市内のプロサッカーチーム(トットナム・ホットスパーズ、ウエストハム・ユナイテッド)の年間チケットを購入し毎週末に観戦、クラブチームのあり方、運営にも造詣を深めた。1993年Jリーグ開幕、日本サッカー界を地域に根付いたものにするための組織づくりに奔走する。2002年のワールドカップの日本への招致活動や2006年のドイツ大会などでは運営等にFIFA理事として活躍している。日本サッカー界の国際的な渉外活動を長年にわたり引き受ける。著書に、「サッカーの国際政治学」(講談社)。(財)日本サッカー協会 <http://www.jfa.or.jp/>

■「芝生」を熱く語る男たち！



▲Jリーグ百年構想のポスター

さて、話はいきなり「芝」の話に。今日のインタビューが「芝刈り」から始まるだろうとは、誰が予測できただろうか。しかし、実際は、日本にいかにか天然芝を増やすかという話から始まったのである。

「サッカー」と言う言葉から、W杯やJリーグ、プレミア・リーグのように、観戦スポーツとして捕らえる方も、football player(サッカーをする人)として自分のするスポーツとして捕らえる方もいれば、あるいは興味の無い方も千差万別であろう。興味のあるなしにかかわらず、イギリスではFootball(サッカー)の話題が聞こえてこない日はない。そして、たとえ都心であっても、芝生があり、嬉々としてボールを蹴る人々が大人も子供もあちこちにいるのである。その「日常としてのFootball(サッカー)」を支えているのが、芝の存在だと言うこ

とに気づかされた。青々としたグリーンは、ゴルフ場だけではなく、そこそこに人々に憩いを与え(立ち入り禁止の芝生はめったにない)、FootballやRugbyの場となり、あるいは馬場を提供している。

もちろん芝の生育環境の問題もあるが、欧州に比べると日本ではまだ少ない芝生。これに関しては、スポーツを手軽に楽しめる環境を整えようと、Jリーグでは「Jリーグ百年構想～スポーツで、もっと幸せな国へ」というスローガンを掲げて、小学校の校庭を芝生にしようという運動を提唱している。

Jリーグ百年構想とは・・・

1. あなたの町に、みどりの芝生におおわれた広場やスポーツ施設を作ること
2. サッカーに限らず、あなたがやりたい競技を楽しめるスポーツクラブを作ること
3. 「観る」「する」「参加する」。スポーツを通して世代を超えたふれあいの輪を広げること

現状としては、芝生の校庭がある学校は、現在1290校とのことだが、例えば杉並区では和泉小学校の校庭を前面芝生化し、保護者を中心にしたボランティア組織が運営管理している。

このように日本が芝に全面的に取り組んだきっかけとなった1981年の試合をご存知だろうか。1981年12月に行われた第二回トヨタカップ(サッカークラブチーム世界一決定戦)では、リバプール(欧州チャンピオンズリーグ優勝チーム)とジーコ(日本代表監督)がいたフラメンゴ(リベルタドーレス杯優勝チーム)が、クラブチームの世界一を国立競技場で

争ったのだが、負けた側のリバプールは、「日本のグラウンドには芝がなかった。グラウンドコンディションが悪かった」と弁解した。当時の日本の芝は冬には茶色であり、緑ではなかった。そこから冬でも緑を保つ芝生の研究がなされ、今や日本は世界のトップレベルにある。

■児童の教育に通じる理念ー「代表強化」だけじゃない、「ユース育成」「指導者養成」



▲1999年ワールドユース準優勝

では、JFA副会長が、同時に世界の理事である、という国際性をもつサッカーが地域づくりに、どうやって貢献できたのか。JFA会長の川淵さんや小倉さんをはじめ、海外滞在経験でつかんだそのシステムを、日本独自の形に修正して持ち込むことで、日本のサッカーを地域に定着させるのに大きく貢献したのだ。

Jリーグ創設の頃、組織体制作りでは、小倉さんはロンドン駐在当時、プレミア・リーグを毎週観戦し、ロンドン市内のチームの経営責任者と親交した経験が十分に生かされた。

川淵三郎会長とともに、欧州における地域に根付いたサッカークラブ運営ノウハウを理解して、日本的なホームタウン制を確立した

／

のがJリーグである、トップチームとその傘下にユース・ジュニアユースなどの下部組織を持つ体制をつくり、5歳から12歳までの一環指導をすることを中心に、スポーツを通して身体を動かす楽しさを幼児・児童から体験させる制度を確立した。

小倉さんは、「海外に先生がいたから」と謙遜するが、20年弱でそれを各地域に根付かせたことは賞賛に値する。

今では、支援やサポートを通じて、一貫したテーマや理念の元に、地区からタレントを発掘された児童たちが、日本代表への養成システムのルート(トレセン制度)に乗ることができ、また、サッカーの得意不得意にかかわらず、サッカーと言うものを楽しみ、互いに尊敬しあう人間性をはぐくむことができる環境作りが徹底されている。後者は、サッカーファンあるいは将来のサッカー選手を育てる理解のある親の育成でもある。

さらに、世界の強豪国と肩を並べるために、「代表選手の強化」「ユース育成」と三位一体をなすのが、「指導者育成」である。公認研修会、指導者資格付与制度、各種講習会、インストラクターの派遣など、体制作りに余念がない。

また、このような理念やスローガンを教育理論として捉えることもできるが、同時に、体制を作り上げ、運営をしていくというビジネスとしてみることも可能であろう。実際、日本に割り当てられたW杯のチケット3万枚だけでも、約4億円という金額だそうだ。経済効果も巨大なものである。

■W杯、5月29日から行きます。 でも、日本戦が見られないんですよ



▲日本対オーストラリア入場券

サッカー W杯は、6月9日に開幕する。全64試合をTV観戦する視聴者数が世界で300億人を超えるスポーツである。おもしろインタビュー当日、2006年度W杯のチケットが日本に到着、小倉さんが記者会見直後のホットなニュースを聞かせてくれた。日本への割り当ては、3万枚。今頃は当選なさった皆さんがドイツ行きをわくわくして待っていることだろう。

JFAの副会長でもあり、またFIFAの理事でもある小倉氏は、FIFA理事としてW杯の会場の責任者としてドイツに赴く。「公平を期すため、日本戦のある会場の担当にはなれません。だから全ての日本戦は見られないんですよ。」とやや苦笑いをしながらお話いただいた。

W杯は、FIFAの理事24人が手分けして、ドイツ国内12都市で行われる各会場の責任者となる。小倉さんは、6月22日の日本と同グループのクロアチア対オーストラリアの試合会場であるシュツットガルトにいたため、同日の日本対ブラジル戦は見ることにはできない。きっと会場のモニターをちらちら眺めながらの仕事になるとのこと。

日本チームは、6月12日・カイザースラウテルン(オーストラリア戦)、18日・ニュルンベルグ(クロアチア戦)、22日・ドルトムント(ブラジル戦)と予選を戦うが、海外での選手たちの心身の健康を維持するため、食事への配慮は大変重要なことであるが、Jビレッジから、早くてうまいスパゲッティを作る優秀なコックさんが二人行くとのこと、食事はお任せあれだ。

■杉並にもう60年以上、 ここから動く気はしませんよ



▲日々精力的に活躍する小倉さん

サッカーが、地域によって支えられ、地域を活性化させうる、ということをもう一度考えてみたい。小倉さんが滞在したイギリスでは、Football(サッカー)は、日本の草野球よりも深く地元に根付いている。

サッカークラブは、志を同じくするものどうしの共通の場所という集いの目的も十分果たし、FCのCAFEでくつろぎ、夏はバーベキュー、冬は暖炉の前で憩う、コミュニケーションの場である。

試合後は、敵味方なく笑いあいながら寛ぐ場所も提供する。日本古来の「武道」は道を究めるものであるが、サッカーは、地域の芝を足元に、地元の子供たちが楽しんで成長し、人々のつながりを深め、広くすることができるスポーツだと言えないだろうか。

そして、これは緑が豊かで、教育を真剣に考え、地域活動のさかんな杉並区にぴったりと合う理念ではないだろうか。小倉さんは、杉並区に暮らし始めてもう3代目、もう60年以上になるそうだが、ここ以上に住みやすい場所はない、と言う。小倉氏の文化的で、かつ温かい人柄は、まさしく杉並人と言えるだろう。

(文：豊田のり子)